

大先輩達の「犠牲」

6月2日の水曜日に札幌で、同窓会札幌支部総会がありました。そこで3月の卒業生の進路状況とともに5月末に行われた高体連・高文連での遺愛生の活躍を報告してきました。11のクラブが優勝・準優勝し、全道大会に出場することになりましたと報告すると、120人近く集まった大先輩達は後輩達の活躍を自分たちの事のように、心から喜んでくださいました。「後輩たちはすごいわねえ。とても嬉しくなっちゃう。」とお話していました。

大先輩達はいつも母校の発展と後輩達の健やかな成長を祈っています。そしてそのために実際に支援もしてくれています。昨年からの遺愛デカルソン教育基金の募金・献金を主に同窓生の方々を中心にお願いしています。額は指定しているわけではありません。ノルマもありません。でも後輩達の活動のために、奨学金のために、遺愛の財政支援のために、募金にたくさんの先輩達が応えてくれています。当初、年間200万円くらい集まればと思っていましたが、まだ8ヶ月なのにすでに2000万円近くなりました。さすが遺愛の卒業生です。募金・献金額は1人1000円から数百万円と額はまちまちですが、遺愛に対する熱い熱い思いがこもっています。これらのお金で、今年から、駿台オンデマンド講習の受講料を無料化しましたし、家計が急変した生徒への奨学金や遺愛アリーナ（大体育館）の借入金返済のための一部にあてる等の予定です。

本当にありがたいです。

校訓の「信仰・犠牲・奉仕」の「犠牲」には、献金も含まれます。自分のものの一部を削って、他の人のために献げる、神様のために献げるということです。校訓を定めた遺愛4代目のデカルソン校長は、今の函館盲学校・聾学校の前身である函館訓盲院の維持のために、訓盲院が火災にあった際に学校再建のために自らたくさんの献金をした方です。犠牲はただ自分の身が削られることではありません。そこには本当の喜びと幸せがともないます。強制されてイヤイヤやるのではなく、自らの意思で積極的に献げるなら、それは必ず大きな喜び・幸せとなってかえってきます。



遺愛の本館前のスズラン

6月10日